

決定

第16回

「国際開発研究 大来賞」

Okita Memorial Prize for International Development Research

主催：一般財団法人 国際開発機構（FASiD）

「国際開発研究 大来賞」は、多様化する国際開発のニーズに対応し新たな指針を提示する研究を奨励するため、当財団の初代評議員会会長を務められた元外務大臣 大来佐武郎氏を記念して、平成9年に創設されました。

第16回（2012年度）の受賞作品が下記の通り決定いたしましたので紹介します。



佐藤 百合 著
『経済大国インドネシア —21世紀の成長条件』
(中央公論新社) 2011年

これまでの受賞作品

- 第1回 廣瀬昌平・若月利之編著『西アフリカ・サバンナの生態環境の修復と農村の再生』農林統計協会 1997年
原 洋之介著『開発経済論』岩波書店 1996年
- 第2回 絵所秀紀著『開発の政治経済学』日本評論社 1997年
深川由起子著『韓国・先進国経済論—成熟過程のミクロ分析—』日本経済新聞社 1997年
- 第3回 中兼和津次著『中国経済発展論』有斐閣 1999年
辻村英之著『南部アフリカの農村協同組合—構造調整政策下における役割と育成—』日本経済評論社 1999年
- 第4回 峯 陽一著『現代アフリカと開発経済学 市場経済の荒波のなかで』日本評論社 1999年
- 第5回 黒崎 卓著『開発のミクロ経済学』岩波書店 2001年
- 第6回 西川 潤著『人間のための経済学—開発と貧困を考える』岩波書店 2001年
石井正子著『女性が語るフィリピンのムスリム社会』明石書店 2002年
- 第7回 脇村孝平著『飢餓・疫病・植民地統治—開発の中の英領インド』名古屋大学出版会 2002年
- 第8回 平野克己著『図説アフリカ経済』日本評論社 2002年
石井菜穂子著『長期経済発展の実証分析』日本経済新聞社 2003年
- 第9回 安原 豊著『メキシコ経済の金融不安定性』新評論 2003年
藤田幸一著『バンガラデシュ農村開発のなかの階層変動：貧困削減のための基礎研究』京都大学学術出版会 2005年
- 第10回 谷 正和著『村の暮らしと砒素汚染—バンガラデシュの農村から』九州大学出版会 2005年
- 第11回 湖中真哉著『牧畜二重経済の人類学—ケニア・サンブルの民族誌的研究』世界思想社 2006年
- 第12回 牧田りえ著『Livelihood Diversification and Landlessness in Rural Bangladesh』The University Press Limited 2007年
- 第13回 武内進一著『現代アフリカの紛争と国家—ポストコロニアル家産制国家トルワンダ・ジェノサイド』明石書店 2009年
- 第14回 田辺明生著『カーストと平等性—インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010年
- 第15回 該当なし

佐藤 百合 著

『経済大国インドネシア —21世紀の成長条件』

(中央公論新社)

審査委員選評

本書は、長年にわたり現地と日本を行き来し、インドネシアを見つめてきた研究者が、新しい発展段階にきたインドネシアの「今」を伝え、同国の将来、ひいては日尼関係を展望した、気迫に満ちた著作である。特に中国、インドに次ぐ第三の新興経済大国という枠組み設定でインドネシアの将来を探っている点がきわめて新鮮である。

アジア金融危機を引き金としたスハルト体制の崩壊、急進的な地方分権化による政治不安定、地震・津波、鳥インフルエンザなど、インドネシアは過去10年余、「混乱と停滞」に見舞われた。金融危機直後に、腕組みしたIMFのカムドシュ専務理事（当時）の前で支援プログラムに署名するスハルト前大統領の写真は今なお記憶に新しく、複雑な思いで受けとめた人は多いのではないだろうか。しかし、その後、インドネシアは大きな飛躍をとげている。2004年のユドヨノ政権成立後、政治的安定を取り戻し、リーマンショックをへた2009年以降は、中国とインドに続くアジア第三の新興経済大国として頭角を現しつつある。開発援助関係者はややもすると、インドネシアを主要な援助供与先としてとらえがちだが、G20のメンバー国、資源国、民主主義が定着したイスラム教国として、今や同国は経済面のみならず、ソフトパワーにおいても存在感を増しているのだ。

著者は詳細なデータ分析や文献調査をもとに「人口ボーナス」と「政治的安定」の二つの条件から、インドネシアは今後も持続的経済成長を遂げる可能性が高いと論じ、日本はこうした「アジアの経済大国」インドネシアと新しい関係を築くべきと主張している。スハルト時代からの大転換、経済テクノクラートや産業人を概観した幾つかの章は、長くインドネシアに寄り添い、政治家・行政官から研究者、企業家、市民に至る様々な人々と信頼関係を築き、同国を多角的に見つめてきた著者だからこそ書ける内容で、本書の分析に厚みを与えている。

大来賞は今年から実践面を重視することになったが、本書は学術性をそなえつつ、ビジネスマンや開発援助関係者を含む多くの読者の関心に応えるタイムリーな良書である。新興国への道を歩むインドネシアの「今」を政治・経済の両方の視点から、しかも歴史観をもって記した著作という点で決定版である。

(政策研究大学院大学 教授 大野 泉)

第16回応募作品の傾向と選考経緯

2011年4月から2012年3月までに出版された国際開発の分野における課題を主たるテーマとした日本語の研究図書を対象として応募したところ、30点の応募があった。

本年度の応募作品の特徴としては、対象地域としてアジアは例年通り多くの応募があったが、アフリカを取り上げた作品が減少した。また単著18点、共編著12点であった。分野の内訳は、開発一般(NGO、人間の安全保障、テキスト等)6点、経済および環境／資源各4点、ビジネス／BOP・CSRおよび教育各3点、政治／法律および人類学／民俗学各2点、農業および社会開発(福祉)ならびに保健・医療各1点、その他3点であった。FASID国際開発研究センターで予備審査を行ない、受賞作品に加えて下記4点が最終審査対象となった。(著者五十音順)

川田 敦相 著

『メコン広域経済圏 インフラ整備で一体開発』 勲草書房

中溝 和弥 著

『インド 暴力と民主主義 一党優位支配の崩壊とアイデンティティの政治』

東京大学出版会

浜野 隆・三輪 千明 著

『発展途上国の保育と国際協力』 東信堂

原 雅裕 著

『西アフリカの教育を変えた日本発の技術協力 ニジェールで花開いた
「みんなの学校プロジェクト」の歩み』 ダイヤモンド・ビッグ社

審査過程において審査委員から出された意見は、おおよそ以下のとおりである。

川田敦相氏の作品は、広域経済圏として発展してきているメコン諸国の現状を具体的に書かれており、今のメコンを知る上で有用であり実践面での貢献が期待できる。反面、現状を提示することが中心となっており、広域的な同地域経済のあり方に関する考察があればなお良かった。

中溝和弥氏の作品は、農村社会の変容と暴動の役割を従来の研究に組み入れ、国民会議派支配の衰退とアイデンティティ政党の台頭の解説を試みている。膨大な資料と現地資料に基づく地域研究書である。

浜野隆・三輪千明氏の作品は、開発の分野であまり光が当たっていない幼児教育の重要性を指摘している。本書は既存資料を幅広く丁寧に分析しており、幼児教育の様々な取り組みを紹介している。

原雅裕氏の作品は、ニジェールの小学校教育の改善を目指したJICA「みんなの学校」プロジェクトの記録としての価値は高く、JICAが試みた参加型の学校運営に関するプロセスが具体的に紹介されている。今後参加型開発の要素や、欧米との違いなどの分析が行われることが期待される。

受賞者の言葉 佐藤百合

思いもかけず国際開発研究大賞を賜り、審査委員の先生方、関係者の皆様方、私の研究生活を支えて下さった沢山の方々に、心より感謝いたします。

私がこの本を書いたのは、長らく「混乱と停滞」に苦しんだインドネシアがいま「安定と成長」を持続できる局面に入った、というメッセージを、一人でも多くの日本人に伝えたい、と思ったからです。「世界の10大経済国になる」というはっきりとした目的意識をもったインドネシアの重要性に早く気づいてほしい、との想いからでした。

スハルト体制が爛熟期から崩壊へと転がり落ちていく3年間を、私は現地で過ごしました。政治、経済、社会が連動し、そのなかで友人たちと喜怒哀楽を分かち合い、初めて私は自分の言葉でインドネシアを語れるようになったと感じました。ところが、皮肉なことに、その後にインドネシアは壮大な試行錯誤の時期に入ってしまいます。民主主義体制の土台が固まるまでに7年、それでもまだ経済は先が見えませんでした。

2009年の初め、その年の選挙でユドヨノ大統領が再選されるのではないか、と思いついた瞬間、目の前の霧が晴れました。「どうか、インドネシアは政治体制の安定はすでに確保した。ユドヨノ政権2期目になれば、経済成長の歯車が回り出す。そうするとインドネシアは、世界第4位の人口に見合った大国にならんとするだろう」と、先が見えた気がしたのです。

そこで得たインサイトを磁力のようにして、政治体制の安定→成長の持続→人口効果、というロジックに関わる理論や既存の議論、統計データや資料・情報を書き集め、インサイトが説得力をもつものかどうかを洗い直していました。地域研究の目標は「まるごと理解」だと先輩たちから教わってきて、これまで私は、それは一国のすべてを知り尽くすことだと思っていました。そして内心、それは「見果てぬ夢」に等しいのではないかと。ですが、そうではなくて、全体像を貫く、大局を見通すロジックを現地観察の積み重ねのなかから掘り出しが「まるごと理解」の一つの形かもしれない、と今は思います。

このように、私はこの本を、私なりの地域研究の書だと思っていますので、国際開発に資する研究を顕彰する本賞を授かったことは大きな驚きでした。というのも、「開発」がある社会に外側から働きかける行為であるとすれば、私の立場はむしろ逆だからです。ある社会にできるだけ寄り添って人々の思いを感じる。その社会に内在するロジックを理解しようとする。そこでの発見を外側の世界の人々がわかる言葉に翻訳して伝える、という作業です。そうした作業が、国際開発に携わる人々のお役に立ち得ることを、立場を異にするからこそ相互補完的な有用性が生じるのだということを、改めて認識した次第です。

霧が晴れた今、私の目の前には長年の研究テーマがまだ解きかけのまま残っています。大来佐武郎先生のお名を冠した本賞に恥じないよう、さらなる精進と挑戦を続けてまいりたいと思います。



著者略歴

佐藤百合 (さとう ゆり) 1958年東京都生まれ。1981年上智大学外国語学部卒業、アジア経済研究所に入所し、インドネシアを担当。在ジャカルタ海外研究員（1985～87年、1996～99年）、インドネシア商工会議所（KADIN）特別アドバイザー（2008～10年）を経て、2012年よりJETROアジア経済研究所地域研究センター長。インドネシア大学経済学博士（2001年）。

主要著書 「インドネシアの企業セクター再編」（『アジア研究』54巻2号、2008年）
「インドネシアの国家統治制度—スハルト後に何が変わったか」
(杉島敬志・中村潔編『現代インドネシアの地方社会』2006年NTT出版)
『インドネシアの経済再編』(編著、2004年、アジア経済研究所)
『民主化時代のインドネシア』(編著、2002年、アジア経済研究所)
『インドネシアの工業化』(共編著、1992年、アジア経済研究所)

表彰式および記念講演会

表彰式 および 著者 佐藤百合氏による記念講演

日 時 2012年12月18日(火) 午後3時～4時

場 所 一般財団法人 国際開発機構 (FASID) セミナールーム

参 加 費 無料

申 込 み オンライン申込み

http://form.fasid.or.jp/contact/award_ceremony/index.php

表彰式・記念講演会に続いて、レセプションを開催します。(4時15分～5時15分)
皆さまにご出席賜りたくご案内申し上げます。



FASIDでは、国際開発分野の研究奨励と促進に資するため、2013年度も「国際開発研究大賞」を実施いたします。国際開発に資する良書のご推薦を賜りたく、よろしくお願い申し上げます。募集については2013年度前半にFASIDウェブサイトにてご案内いたします。

審査委員会

審査委員長： 杉下 恒夫 (FASID 理事長)

審査委員： 荒木 光弥 (株式会社国際開発ジャーナル社 代表取締役)

絵所 秀紀 (法政大学 教授)

大来 洋一 (政策研究大学院大学 名誉教授)

大野 泉 (政策研究大学院大学 教授)

岡田 尚美 (FASID 専務理事)



一般財団法人 国際開発機構 国際開発研究センター (服部／渡邊)

Foundation for Advanced Studies on International Development

～2012年10月移行により和文名称が変わりました。略称と英文名称は変更ございません～

〒106-0041 東京港区麻布台2-4-5 メソニック39MTビル6階

TEL : 03-6809-1995 FAX : 03-6809-1387 E-mail:okita2012@fasid.or.jp <http://www.fasid.or.jp>